特集 カスタマイズ

チューニングやドレスアップ

個性あふれる自分らしい一台を

SUV人気が牽引 広がる需要

ハードからソフトへ

カーカスタマイズ（合法改造）が広がりを見せている。車の走行性能を高める「チューニング」や内外装を自分好みに仕立てる「ドレスアップ」に加え、サーキット走行などを楽しむ「モータースポーツ」も活発化している要因だ。成熟した国内市場では、軽自動車からコンパクトカー、ミニバンだけではなく、スポーツカー、輸入車に至るまで幅広い車種でカスタマイズを楽しむニーズが存在する。今後、電動車の普及がさらに進み、販売後も機能更新できるソフトウエア・デファインド・ビークル（SDV）も登場することになれば、車を楽しむカスタマイズメニューの多様化が一段と進むことになりそうだ。

楽しみ方 それぞれ

カスタマイズと言っても、楽しみ方は人それぞれだ。かつてはスポーツカーを改造するチューニングと同義語に近かったが、近年は「車の走行性能を高める」目的だけではなく、「車で個性を表現する」という要素が高まっている。

特に人気なのが、SUVのカスタマイズだ。アウトドアとの親和性が高く、キャンプやスキーといったアクティビティーでの使い勝手を高めるアイテムが豊富に用意されている。また、スポーツカーのチューニングでは車高を下げる「ローダウン」が定番だが、SUVでは逆に車高を上げる「リフトアップ」が主流。大口径のブロックタイヤと組み合わせることで、〝ワイルド感〟を際立たせるカスタマイズとして人気が高い。

スポーツカーのチューニングも根強い人気がある。昨今は若者でも手の届きやすい価格になってきたトヨタ自動車の「86（ハチロク）」やスズキ「スイフトスポーツ」の中古車をベースにするものが、依然として高い支持を得ている。日産自動車の「フェアレディZ」やスバルの「WRX S4」なども高額ながら、コアなファンが少なくない。

一方、「スカイライン GT-R」「スープラ」「NSX」などの往年の名車を長く乗り続けるユーザーを支えるため、自動車メーカー各社は製造中止となった補修部品の復刻にも力を入れている。トヨタ（GR）、日産、ホンダではいずれも「ヘリテージパーツ」との名称で展開しており、対象アイテムの拡充を進めている。

モータースポーツを通じたカスタマイズ振興も活発になっている。自動車メーカーだけではなく、新車販売店においても社員参加型の自社チームを結成し、レースに出場するケースが目立つ。また、マイカーで気軽に参加できる走行イベントとして、日本自動車連盟（JAF）が実施している「オートテスト」も人気を博している。



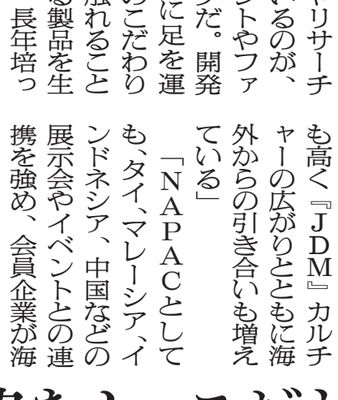
カスタマイズは個性を表現できる場だ


EVカスタマイズも増えている

毎年1月に開催されるカスタマイズの祭典「東京オートサロン」。近年は米テスラなどの電気自動車（EV）のカスタムカーの展示も増えている。テスラのようなEVの特徴の一つがソフトウエアのアップデートで、新機能の追加や性能改善が通信で行える。こうしたSDVの普及が見込まれる中、「SDVは究極のカスタマイズだ」と話す業界関係者もいる。ハードからソフトへ。カスタマイズの楽しみは時代とともに進化を続ける。

日本自動車用品・部品アフターマーケット振興会（NAPAC） 中嶋 敬一郎会長

本物志向へのシフト加速



アフターパーツ業界をけん引する日本自動車用品・部品アフターマーケット振興会（NAPAC）。モータースポーツの発展やカスタム文化の普及、安全性の確保に取り組む同会の中嶋敬一郎会長に、業界の最新動向から日本の「ものづくり」へのこだわり、海外市場への展望、未来のファンづくりについて聞いた。

―かつてと比べ、ユーザーの購買傾向に変化は

「一言で言えば、『本物志向』へのシフトが明確になっている。以前はアジア圏などから安価な模倣品や粗悪品も流入していたが、現在はアルミホイールをはじめ、サスペンションなどの足回りパーツまで、信頼できるブランドや品質の高い『本物』が選ばれる時代になった」

「ユーザーが非常に賢くなっていると感じる。実際に使えば製品の良し悪しは分かるし、安価な製品は劣化やトラブルにつながりやすいことを経験として知っている。さらに、メルカリなどのフリマアプリや個人間売買が一般的になり、不要になったパーツを売却できる環境も整った。実績のあるブランド品は使い終えた後も価値が残るため、結果として賢い選択として選ばれている」

―製造メーカー（会員企業）の開発・ものづくりの強みは

「『決して妥協しない姿勢』と『徹底したターゲットリサーチ』が強みだ。万人向けの商品ではなく、『この車種の、この層のユーザーが何を求めているか』を絞り込み、サイズ感やデザインまで突き詰めている」

「また、安全性を確保するための基準が整備されていることも大きな特徴だ。NAPACでは、アルミホイールについてはJWA基準、スポーツマフラーについてはJASMA基準、それ以外のカスタマイズパーツについてはASEA基準を設けている。単にクルマを格好良くするだけではなく、安全性や品質を担保したうえでカスタマイズを楽しんでもらうことが重要だと考えている」

「その開発やリサーチの場となっているのが、車種限定イベントやファンミーティングだ。開発担当者が現場に足を運び、オーナーのこだわりや熱量に直接触れることで、求められる製品を生み出している。長年培った技術や経験だけに頼らず、現場の声をものづくりに反映している点も、日本のパーツメーカーの強みだ」

―海外市場への展開と会員企業への支援策は

「アジアを中心に、日本車や日本製パーツへの憧れや信頼は非常に強い。きめ細かな設計や精密なものづくりへの評価も高く『JDM』カルチャーの広がりとともに海外からの引き合いも増えている」

「NAPACとしても、タイ、マレーシア、インドネシア、中国などの展示会やイベントとの連携を強め、会員企業が海外へ進出しやすい環境づくりを進めている。規格認証や言語などの課題はあるが、市場は大きい。市場情報の発信や現地とのネットワーク構築を通じ、海外展開を目指す企業を支援していきたい」

―今後のカスタマイズ業界とNAPACの展望は

妥協なし こだわりの製品開発

「カスタマイズの本質は、クルマを通じた『自己表現』と『ライフスタイルの充実』だ。派手に飾るだけでなく、シンプルに魅力を引き出すものや、走りの質を高めるものまでスタイルは多様だ」

「EV化や安全基準の厳格化など環境は変化するが、『自分好みのクルマに乗る楽しさ』はなくならない。安全で高品質なパーツの基準を守りながら、メーカーとユーザーがつながる場をつくり、次の世代へクルマ文化の魅力を伝えていきたい」



WHEEL
WILDBOAR D
ワイルドボアD
7200-61F [Wood Copper]
6.0J × 15 inch (-5)
GRILLE
Layered Grille 3033-7
レイヤードグリル Matte Black（塗装済）
LAYEARD GRILLE OPTION
Flat LES Light Bar
フラットLESバー
3033-72
※IPF製フラットLESランプ2灯と専用ハーネスがセット
SUSPENSION
2026 日刊自動車新聞 用品大賞
ZERORISE
車高はノーマルのままで
走りを向上させるサスペンション
Coil Springs コイルスプリング（ノマド用）
1028-8A ※写真は参考までにJB74シエラ用です
Apio Incorporated
アピオ株式会社
〒252-1124 神奈川県綾瀬市吉岡651
Tel. 0467-78-1182 https://apio.jp



主要用品メーカー

ものづくりを支える技術と一押しの商品

クルマ・カスタマイズ文化の醸成に貢献を果たす自動車用品メーカー。生み出される数々の製品はデザイン性と機能性が融合し、機能美へと昇華したものも多く、国内外から高い注目を集める。その背景には各メーカー陣営のものづくりに対する並々ならぬ情熱が横たわる。それはものづくり大国、日本の誇りと言って異論はないはずだ。ここでは主要メーカーのものづくりに対する取り組み、そして今一押しの製品など紹介する。

スプレッド／スフィアライト

純正ＨＩＤ交換用ＬＥＤキット



清松　信吉社長

カー用品ブランド「スフィアライト」を展開するスプレッド（清松信吉社長、東京都港区）は、製品開発において数値による性能評価と実際の使用感を重視している。明るさを示す数値だけでなく、運転者にとっての見やすさまで考慮し、製品の改善を重ねてきた。力を入れる製品の一つが、純正ＨＩＤヘッドライトをＬＥＤ化する「純正ＨＩＤ交換用ＬＥＤキット」だ。

開発で大切にしているのは、客観的な数値に基づく性能評価だ。光の明るさを示すカンデラなどを基準にしながら、測定値だけでは運転者が実際に感じる見やすさを十分に評価できないという課題にも向き合ってきた。光の総量を示すルーメンも広く使われているが、数値が高ければ必ずしも見やすいとは限らない。数字だけでなく、実際の使用感も重視する姿勢が製品づくりを支えている。

数値評価に加え使用感重視

費用負担軽減にも

同キットを提案する背景には、ヘッドライトの検査基準変更がある。ロービームによる検査への移行が進み、レンズの劣化や内部の反射部品の傷みなどによる光量不足が整備現場の課題となっている。状態によってはレンズの研磨や交換が必要となり、修理費が高額になるケースもある。

ヘッドライトの明るさは、夜間の視認性や安全な運転に関わる重要な要素だ。一方、純正ＨＩＤを使用する車両では、経年劣化によって明るさが低下することもある。こうした課題に対し、スフィアライトは交換用ＬＥＤキットを通じて、明るさの改善と費用負担の軽減を提案する。

同キットは、純正ＨＩＤのバルブをＬＥＤに交換することで、ヘッドライトの明るさ向上を図る製品だ。スフィアライトによると、製品によっては従来比約１７０％の明るさを実現する。純正部品の交換に比べて費用を抑えられる可能性もあり、車両を長く使いたいユーザーに向けた選択肢となる。

社長は同キットの強みについて、「純正ＨＩＤをＬＥＤに交換することで明るさの向上を図りながら、ヘッドライト全体を交換するより費用を抑えられる可能性がある。整備現場とユーザー双方にメリットのある提案につなげていきたい」と話す。



整備現場での課題を解決する「純正ＨＩＤ交換用ＬＥＤキット」

ブリッド

ＧＩＡＳⅢ



高瀬　嶺生社長

国産スポーツシートブランドを展開するブリッド（高瀬嶺生社長、愛知県東海市）は、ドライバーの体格や運転時の姿勢、車との一体感にこだわったシートづくりを進めている。単に体を支えるだけでなく、運転操作をしやすくし、走る楽しさを高めることが狙いだ。形状や骨格の設計から素材の選定まで、細部を見直しながら性能と快適性を追求している。

同社が自信を持って勧める製品が、リクライニング機構を備えたスポーツシート「ＧＩＡＳⅢ（ガイアススリー）」だ。フルバケットシートに匹敵する剛性とホールド性を目指しながら、背もたれの角度を調整できる利便性も両立させた。開発で重視するのは、

設計や素材 徹底して快適性追求

体格に合わせた形状で車と一体感

日本人の体格に合う形状と、運転中に体が動かないよう支える性能。体がずれると、ドライバーは無意識に踏ん張る必要が生じ、疲労や操作のずれにつながる。適切な剛性を持たせることで、車との一体感を高めている。

「ＧＩＡＳⅢ」の開発に携わった大田直彦工場長は「従来モデルから剛性をさらに高めることに最も苦労した」と振り返る。リクライニング機構の部品を変更し、それに合わせて周辺部品を一から設計。さらに、頭部保護装置「ＨＡＮＳ（ハンス）」の使用を想定し、小柄なドライバーでもベルトを適切に装着できる開口部と、シートの強度を両立させた。「素材の曲げ方や厚み、形状を細かく調整し、強度を確保している。わずかな形状の違いでも性能が変わるため、細部まで検討を重ねた」と説明する。

快適性の向上にも取り組んだ。座面にはモールドウレタンを採用し、クッション性や耐久性を改善。シート形状も見直し、長距離移動での疲労軽減を目指した。体を支える剛性と、衝撃を吸収するしなやかさのバランスも重要な要素となる。

高瀬嶺生社長は「ＧＩＡＳⅢは、当社が自信を持って勧められる製品。リクライニング機構を備えながら、フルバケットシートのような一体感を追求した」と話す。走行性能だけでなく、日常の移動における快適性にも配慮した。細部まで妥協しないものづくりが、同社のシート開発を支えている。



性能と快適性を追求した「ＧＩＡＳⅢ」





横浜ゴム

iceGUARD8 SUV

横浜ゴムはスタッドレスタイヤの開発に冬用タイヤ技術コンセプト「冬テック」を採用している。冬テックはミクロレベルの〝氷とゴムの接触の密度〟とマクロレベルの〝路面とタイヤの接触の面積〟、2つの視点において「接触」を最大化しようとする試みだ。

コンパウンドとして開発された「冬ピタ吸水ゴム」は多層構造で、吸水力に優れる天然由来素材「水膜バスター」により氷上で滑る原因となる水膜を吸水し、接触密度の向上と氷上性能の高度化を実現している。

◇

冬テックを初採用した乗用車用プレミアムスタッドレスタイヤ「iceGUARD（アイスガード）8」に次いで今年9月、SUV用スタッドレスタイヤとして「iceGUARD8 SUV」を発売した。

コンパウンドとして新たに開発した「冬ピタ吸水ゴムSUV」を採用している。水膜バスターを高密度に配置することで、その吸水量（ミクロレベル）を3%向上させるとともに、氷とタイヤの接触の密度（マクロレベル）は従来品比で61%増を実現した。

◇

トレッドデザインの開発については人間特有のひらめき・発想力とAIが得意とする膨大なデータ処理能力を組み合わせたフレームワーク「HAICoLab（ハイコラボ）」を活用している。

AI／シミュレーション技術により、冬用タイヤに求められる4つの機能（圧縮抵抗、雪柱せん断力、凝着摩擦力、エッジ効果）を最適かつ最大化したプロファイルを抽出。これにより、従来の同社SUV用スタッドレスタイヤと比較し、接地面積は3%、ブロック剛性は16%増を実現。溝エッジ量は19%増加させるとともに「ラグ溝倒れ込み抑制サイプ」を配置したことで雪上性能を一段と高めている。

合わせてシリカを投入したSUV専用配合、ゴムの硬化を防ぐさまざまなアプローチを組み合わせた「劣化抑制配合」技術により耐摩耗性能を11%向上させており、約4年後も氷上摩擦力の低下を抑制する。

「iceGUARD8 SUV」のサイズは、リム径は16～20インチ、タイヤ幅は175～275ミリ。計28サイズをラインアップする。



2つの視点で“接触”を最大化

1.接触の密度
ミクロレベル
氷とゴムの接触点を最大化
※接触の密度＝単位面積当たりの氷とゴムの接触点

冬テック

2.接触の面積
マクロレベル
路面とタイヤの接触の面積を最大化

氷とゴムの「接触」を最大化

従来比61%増　格段に氷上性能向上

BBSジャパン

BBS鍛造ホイール

鍛造アルミホイールメーカーとして揺るぎない地位を築くBBSジャパン。フォーミュラ1をはじめとしたモータースポーツ向け製品や自動車メーカーの純正カスタマイズ製品など幅広く手掛ける。

BBS鍛造ホイールはモータースポーツ向け、市販製品ともに同じラインで製造していることが大きな特長だ。すべての製品の品質は総じて高く、レーシングスペックであることが魅力となり、多くのドライバーを惹（ひ）き付ける。

こうした同社のものづくりを語る上で2つの要素〝唯一無二となる素材自体の作り込み〟と〝造形ノウハウ〟が欠かせない。

市販製品の素材について、JIS規格に分類される6000系、7000系アルミニウムの配合を吟味し、製品ごとに最適な素材を作り込んでいる。同社開発本部の村上貴志本部長は「配合材・配合比は40年間にわたるホイールづくり、そしてモータースポーツ製品への参入で培ってきた知見に基づいたもの」と説明する。そこには車種、デザイン、剛性・しなり、製造時の扱いやすさなどさまざまな要素が複合的に絡む。村上本部長は一連を引き合いに「開発は生みの苦しみ」とその困難さをにじませるとともに、これまでリリースしてきた製品に対する自信を隠さない。

長年の知見に基づく素材作り込み

試行錯誤重ねた造形ノウハウ


FORTEGA製鍛造1ピースホイール「FL」

開発本部
村上貴志本部長


国内ホイールメーカーとして高スペックの1万2千トンプレス機を導入する

造形ノウハウについて特筆すべき点は、基本的なホイールの形状からデザインまでの一連を複数の金型だけで叩き出す「意匠鍛造」。そして鍛造アルミの塊からシャープでエッジの効いたデザインに削り出す「切削技術」の2つのノウハウを有していることといえる。

鍛造工程においては、プレス時に加える熱に対する緻密な温度管理が求められる。どのような金型を用い、どのように圧力をかけて変形させていくか、開発段階においてシミュレーションを繰り返し、最適な製造手法を探る。このため、同社では金型も自社で製造している。

幾十にも重ねられた網の目をかいくぐる形で製品の仕様、生産手法が決まり、量産に入った段階においても「見直しの発生は必ず生じる」（村上本部長）。ここでは現場の熟練工・マイスターによる経験・暗黙知に基づいた指摘が何よりも重要なものとなる。「製造において最も重要なことは、いかに安定した品質を安定して供給できるかどうか。この1点につきる。彼らの存在なくしてBBSのホイールは生み出せない」（同）と強調する。

同社では新素材FORTEGA（フォルテガ）を開発し、2025年に第1弾製品として「FL」を発売した。電動化に伴い重量化するSUV向けに生み出された製品だ。FORTEGAについて「素材自体に剛性を持たせた」（同）とし、素材の開発だけで10年の歳月が掛けられている。その期間は同社最長で、開発陣の並々ならぬものづくりに対する熱意を体現した製品となっている。

YOKOHAMA
日本の
冬の安全は、
スタッドレス
タイヤが守る。
詳しくはWEBへ
ヨコハマが氷上性能を
磨きつづける理由とは
iceGUARD アイスガード
iceGUARD 8 IG60
NEW iceGUARD 8 SUV
iceGUARD 7 IG70
iceGUARD IG91 for VAN
横浜ゴム株式会社 0120-667-520 | https://www.y-yokohama.com/brand/tire/iceguard/
冬の道も安全運転をこころがけましょう 月に一度は空気圧の点検を。
製品情報はこちら



主要用品メーカー
ものづくりを支える技術と一押しの商品

アピオ

ジムニーノマド専用ベッドキット

所定の位置に置くだけの簡単設置

座席を取り外さずスペース確保

ジムニー向け用品の開発・販売を手掛けるアピオ（河野仁社長、神奈川県綾瀬市）は、スズキ「ジムニーノマド」専用のベッドキットを開発している。工具を使わず、所定の位置に置くだけで簡単に設置できる手軽さに加え、車内の段差を解消して快適な寝床を確保できる点が特徴だ。日本国内でのものづくりにもこだわり、車種専用設計ならではの利便性を追求する。

車中泊は、釣りや自然撮影などの趣味を楽しむための手段としても広がっている。早朝から活動するため、現地近くまで移動して車内で休み、起床後すぐに目的の場所へ向かう。こうした使い方では、道具を積む空間と快適な就寝スペースの両立が求められる。

大型車は車内空間に余裕がある一方、狭い林道などでは取り回しに制約がある。小型車は機動力に優れるが、就寝スペースの確保が課題となる。今回の製品は、ソロで釣りや撮影に出掛けるユーザーを主な対象に、限られた空間を有効活用できるよう開発を進める。

最大のこだわりは、後部座席を取り外さずにベッドスペースを確保することだ。座席を外せば平らな空間をつくりやすいが、取り外したシートの保管場所が必要になる。そこで、シートを残したまま車内の段差を埋め、できるだけ平らな寝床を実現する構造を目指した。


後部座席を取り外さず、車内の段差を解消して快適な就寝スペースを確保する専用ベッドキット


イベント会場で来場者の注目を集めるデモカー

設置は工具不要で、部品を所定の位置に置いて組み立てる方式を採用。手軽に設置・取り外しができ、通常の車内空間にも戻せる。ベッド設置後も運転席側の後部座席を使えるため、釣り道具の準備やカメラ機材の手入れ、食事などにも対応する。持ち運びや保管に使える専用収納袋も付属する予定だ。

開発では、車中泊用ベッドの製造実績を持つセルタンと協力。同社のブランド「ノマドベース」が培った、車内の段差を埋めて平らな寝床をつくる技術や、ウレタンの加工・硬さ調整に関する知見を生かす。国内での製造にこだわったメイドインジャパンの製品として、12月ごろの発売を予定し、インターネット通販や量販店などでの販売を目指す。

河野社長は「シートを外さずに使えることが一番のこだわり。車中泊用品は数多くあるが、ジムニーノマドに合わせて使い勝手を追求した。趣味の時間をより充実させる製品として提案したい」と話す。

エッチ・ケー・エス（HKS）

HIPERMAX S

「史上最高の乗り心地」を実現

快適性と運転する楽しさを両立

自動車用チューニングパーツの開発・製造・販売を手掛けるエッチ・ケー・エス（HKS）は、車高調整式サスペンションキット「HIPERMAX（ハイパーマックス）S」をリニューアルした。開発から設計、製造までを自社工場で一貫して手掛ける強みを生かし、乗り心地と走行性能の向上を追求した。発売から5年間で蓄積したユーザーの声を反映し、従来モデルの長所を生かしながら完成度を高めている。

同製品は、5年前に「史上最高の走り心地」をコンセプトとして誕生した。街乗りでの快適性だけでなく、運転する楽しさも両立させたサスペンションとして支持を集めてきた。販売を重ねる中で寄せられた要望が、今回のリニューアルにつながった。

開発で課題となったのは、完成度の高い製品をいかに進化させるかという点だ。新たな機構を追加するのではなく、既存の構成部品や仕様を見直し、性能を磨き上げる方向を選んだ。細部の改良を重ねることで、従来モデルを超える走り心地を目指した。


走行テストを重ね、日常の快適性と運転する楽しさを追求するHKS

こうした開発を支えるのが、HKSの一貫生産体制だ。同社はサスペンションの開発、設計、製造を自社工場で行う。走行テストで狙い通りのフィーリングが得られなければ、ショックアブソーバーやスプリングを速やかに再試作し、検証を繰り返す。また、製造現場からも品質向上につながる形状や仕様、仕上げについて意見を反映する。開発部門と製造部門が連携し、妥協のない製品づくりを進めている。


自社一貫生産体制の下、細部の改良を重ねて完成度を高めた「HIPERMAX S」

購入後のサポートにも一貫生産の強みが生きる。サスペンションは使用に伴って摩耗・劣化するが、自社工場でオーバーホールに対応し、長く使い続けられる体制を整えている。維持管理まで見据えたものづくりも特徴だ。

開発陣が目指したのは、通勤や通学などの日常使いから休日のドライブ、サーキット走行まで、幅広い場面で運転を楽しめるサスペンションだ。よりスポーツ走行に特化した「HIPERMAX R」と役割を分け、快適性と走る楽しさの両立を追求した。

自動車の性能や技術が進化する中、サスペンションに求められる性能も変化する。HKSは今後もユーザーの声と現場で培った技術を製品に反映し、走り心地を追求していく考えだ。

SPHERE LIGHT
LIGHTING UPGRADE BY SPHERE LIGHT
HIDも、ハロゲンも。
次の光は、LEDへ。
光の課題を、光の感動に。
純正HID用
LEDヘッドライト
純正HIDからLEDへ
主力バルブタイプ
D2S/D2R・D4S/D4R
11,000lm
（2灯合計値）
RIZINGα
Gen4
ハロゲンからLEDへ
主力バルブタイプ
H4/H8・H9・H11・H16/H19/
HB3・HB4・HIR2
4,200lm
（2灯合計値）
39th 日刊自動車新聞 用品大賞 2026 ロングセラー部門 受賞
2026.08.01 FROM THIS DATE 対象車は全国でロービーム計測へ。
スフィアライトは、車検対応設計のLEDヘッドライトをご提案します。
※車検の合否は車両・灯具の状態などにより異なります。適合をご確認ください。
適合情報はこちら